

キーパーソンの壮大なる計画

産業近代化を牽引した井上勝、安場保和、團琢磨

維新後、殖産興業が日の目を見るまでには、多くの試練と時間を必要とした。そして明治期において三つの段階を経て、先駆的な近代企業が立ち上がっていく。今号では、井上勝、安場保和、團琢磨の産業近代化を牽引した三人のキーパーソンに着目。彼らを一大事業に駆り立てた、想像を超える熱き情熱と行動力の足跡をたどる。

殖産興業に見る段階的發展

さて、殖産興業とは何か、その経過はどのように辿ったかをここで一覧しておきたい。

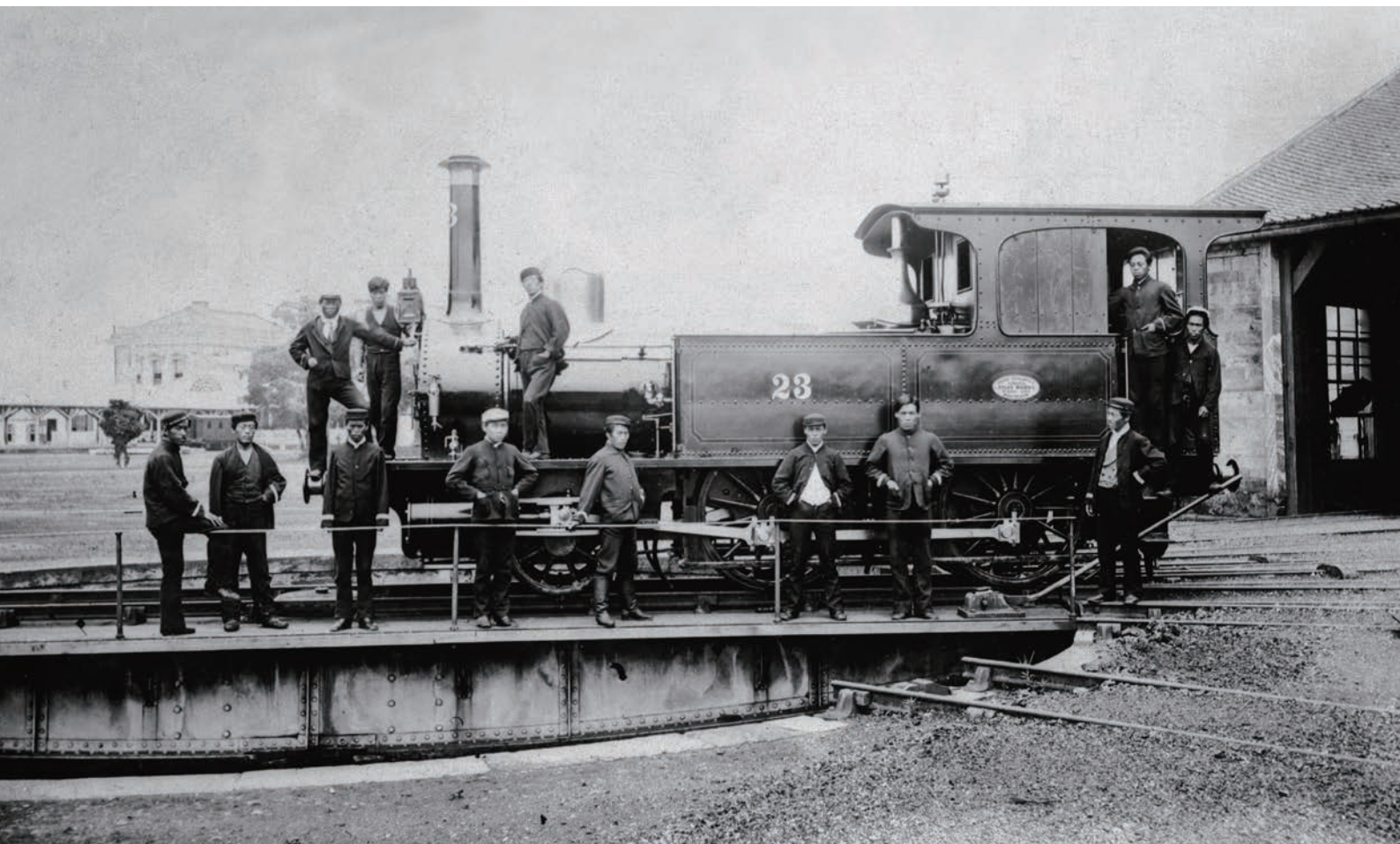
ペリー来航以来、有識者の間では「富国強兵」と「殖産興業」は共通のスローガンとなり、とくに開明派の藩主をもつ藩藩においては現実にもその政策が実行されていた。その最も先進的な事例が薩摩における島津斉彬の開化策であり、近

代様式工場群の「集成館事業」に見られる。また、佐賀藩の鍋島閑叟による製鉄や蒸気機関の製作などの諸施策だった。また土佐や越前などの目覚めた藩では、輸出品となる生糸や茶の生産、石炭の開発、樟脳や海産物などの生産が奨励された。しかし、新政府の基本方針として明確になったのは、廃藩置県後のそれも使節団の帰国後であり、その顕著な例が大久保利通の殖産興業に関する建言だった。

これによって、まだお題目であり断片的であったものが、統一国家の方針として整理され計画性をもつことになった。しかし、西南戦争までは士族の反乱や農民一揆なども頻発して政治的な安定が得られず、それも散発的であったといえる。経済評論家の高橋亀吉はそれをもよを、「日本近代経済形成史」(昭和43年刊)において次のように述べている。

「維新後の殖産興業は約三つの段階を経て、明治16、18年期に至りようやく近代企業条件を一応具備するに至ったとみることが出来る。第一段階がすなわち明治1、10年期であって、封建制度変革に伴う旧秩序の破壊と新秩序建設の過渡的摩擦、混乱、不安動揺のため、殖産興業意欲が朝野ともにいまだ本格的にならなかつた時期である。第二段階はおよそ明治11、15年期であって西南戦争の鎮定を画期に朝野ともに殖産興業にいよいよ本腰を入れはじめた時期である。第三段階はおよそ明治16、18年期であって、近代企業台頭の条件が

*編集部注：井上勝は、伊藤博文らと共に幕末、長州から英国に密航した留学生でした。岩倉使節団には参加していませんが、岩倉具視主導のもと、鉄道の近代化に奔走した一人として今回取り上げました。



蒸気機関車の前に立つ、初の日本人機関士たち 鉄道博物館所蔵

「鉄道の父」と呼ばれし男

岩倉具視は欧州各国で王室の在り方と藩屏となる貴族社会のあり方を見てきた。そして、いわば「華族の棟梁」として華族の資産保護と授産の方法を考え、二つのことを主唱した。一つは公家と大名からな

何とか一応具備し、先駆的な近代企業がわが経済の檣舞台に登場しはじめ、そのモデル的役割を、企業的にようやく演じはじめた時期である」

そして、具体的な形としては、第一は在来の産業、つまり農業と鉱業の近代化であり、第二には政府主導の紡糸、製紙、セメント、ガラス、肥料などの工業化であり、第三には鉄道、道路、港湾など運輸交通の整備であり、第四には銀行、保険などの金融制度の整備だといえる。以下、各分野における使節団メンバーの関与と活躍ぶりを見ていきたい。

華族は秩禄処分による金禄公債を原資とする銀行の設立であり、明治10年に有力大名を主に16名が発起人になり毛利元徳を頭取とする第十五国立銀行を設立した。そして明治14年には、もう一つの事業として日本鉄道株式会社の設立を行うのである。それは東京から青森までの鉄道敷設をめざすものであり、アイデアとしては高島嘉右衛門(高島易断本家、事業家)の構想であったが、開明派の公家や大名が集まって第十五国立銀行の投資先として立案したものであった。

この企画には使節団のメンバーだった、工部省の肥田為良、大蔵省の安場保和、左院の高崎正風、左院の安川繁成、それに留学生だった



逢坂山トンネルと日本最長を誇る天竜川鉄橋の竣工当時の写真 いずれも『子爵井上勝君小伝』より画像転載



團琢磨のポートレート
写真提供/大牟田市



安場保和の肖像
奥州市立後藤新平記念館所蔵



若き日の井上勝
鉄道博物館所蔵

大久保利通の長男・利和らが参加している。そのあたりの事情について、高橋亀吉は次のように書いている(『日本近代経済形成史』)。

「明治14年1月、安場保和、中村弘毅(旧土佐藩士、太政官書記官長など、佐々木高行に近い)、高崎正風、安川繁成の四人が鉄道敷設を企図し、岩倉具視邸で、鉄道会社条例案・利益保証法案を具した建議書を作成した」とあり、株式会社方式をとり、株主になる華族諸家を召集して、岩倉自身が、企画、概要を説明している。「上皇族より朝野の別なく一般人民の同心協力によって、全国一条の鉄道を敷設せんとする」遠大な構想であった。

第一次計画が東京から青森まで結ぶ路線であり、実際の工事や運営についてはすでに新橋・横浜間の鉄道や京都・大阪・神戸の鉄道を開設させて、当時すでに工部省の鉄道局長になっていた井上勝(旧長州藩士、幕末英国へ密航した留学生)の監督指導によるところが大であった。幹部人材は官により現場の作業は地元の人員に任せら

る、いわば官民共同の大仕事となった。着工は明治15年6月、18年には宇都宮まで、20年には仙台まで、24年には青森まで全線を開通した。鉄道工事については当初はお雇い外国人の力に依存したが、井上は早急に各種の技術者を育成し、この路線の工事に関してはすでに日本人技術者がそれぞれの部門の責任を負って完成させている。

その全通式は帝国ホテルで盛大に行われ、皇族、各大臣以下、百官に及び、松方総理の祝辞のあと、井上は「岩倉公ノ心霊ニ告クルノ辞」(岩倉は明治16年に逝去)を述べた。

地方産業の 開発に活躍

安場保和は旧熊本藩士で、横井小楠の門下生となり四天王といわれ、実学党に属し藩論を佐幕から王政復古へと変えた。明治2年には徴士となり新政府の参与となる。その後、胆沢県(水沢)の大参事、酒田藩大参事、熊本藩小参事を経て、大蔵省に転じ租税権頭になる。

た人物がいる。当時はとくに公共インフラ的な施設は主導での事業も多く、半官半民の経営が多かったことを示している。

石炭産業の 近代化に奮闘

團琢磨は金子堅太郎とともに福岡藩からの留学生である。明治4年当時14歳と19歳だった。二人はボストンへ向かい、英語を習ううちに團はこれからは産業が大事であることを知り鉱山学を学ぶこととなる。金子は法律が大事だとみてハーバード大学へ進む。團はマサチューセッツ工科大学の前身である鉱山専門学校へ入学する。まだ小規模で後に鉱山学の第一人者になるリチャード教授から親身に教えを受けることができた。

帰国後は一時職がなく大阪専門学校や東京帝大で天文学の教鞭をとるなどしていたが、鉱山技術を生かすべく工部省に志願し、時の工部卿の佐々木高行や金子堅太郎(当時佐々木の秘書でもあった)の



安積疎水事業の一環としてつくられた十六橋水門 写真提供/郡山市

使節団に参加しワシントンまで行ったが、「わしのような歳とつたもの(37歳)が、貴重な金を使って旅するのは忍びない」といって、古武士的硬骨漢ぶりを発揮し単身帰国してしまう。

帰国後は福島県の県令となり、以後、愛知、福岡の県令を重ね、地域の開明化に挺身する。安場の目にはアメリカ大陸の開拓状況を見ただけでも大いに学ぶところがあった。そこで痛感したことは、日本には原野、荒蕪地の類いがまだ多くあり、畑作(麦、野菜、果実など)牧畜(馬、牛、羊など)の余地が十分にあるということであった。

福島県にはすでに猪苗代湖から水をひき灌漑設備を整備して農地化しようというアイデアがあった。安場は北海道開拓に情熱を燃やしていた中條正恒(米沢藩士、後に安

配慮もあり入省、官営だった三池炭鉱へ赴任する。三池炭鉱は埋蔵量も多く品質もいいため外貨稼ぎの花形だったが、主力坑が湧水問題で手がつけられない状況だった。当時の大蔵卿松方正義は外貨獲得のためにも石炭の開発が必須だとみてその解決策を探すため團に米欧への出張を命じるのだ。明治20年、團は勇躍して渡航、米英欧の丹念な調査の結果、強大な排水ポンプの導入しかないと確信して帰国する。しかし、当時の政策で炭鉱は三井へ払い下げられることになっていて團は窮地に陥った。

しかし、三池の石炭を一手に販売していた三井物産の益田孝と出会い、話をするうちに意気投合し、益田の英断もあって團は三井に移ることを条件に巨額な投資に踏み切ることになる。このとき二人は失敗すれば切腹覚悟だったとの決心を披歴している。そして幾多の難関を乗り越え、「土魂」で切り抜けてようやく成功に導くのだ。これを契機に、三池炭鉱は三井のドル箱的存在となり、事業は鉄道や港

積開拓の父とよばれる)を県の典

事(課長)に据え、安積開拓事業を具体化するよう委任する。安場と中條はすでに地元で進められていた大槻が原の開拓を本格化し、福島の本松藩からの開拓民を受け入れ、さらには郡山の富商の投資を仰いで開成社を組織、県と共同での事業を始める。安場は明治8年、愛知県の県令に転任するのだが、内務卿の大久保利通が、翌年明治天皇の東北巡行の下見にこの地を訪れる。中條はこれを好機として大槻が原の開拓が成功したことを伝え、より大規模な安積開発プロジェクトを熱心に説くのである。大久保は猪苗代湖から水をひく壮大な計画に共鳴し、その実現を国で支援することを約束する。そして明治11年3月、国営開拓第一号として「安積開拓」の予算が計上されるのだ。大久保はその2か月後に凶刃に倒れるが、中條の情熱と大久保の遺志を継いだ内務卿伊藤博文の支援もあって事業は継続される。結果、オランダから土木技師

湾への投資となり、輸出産業としても重要な担い手となる。

その後、團は三井鉱山の社長から三井合名の総帥となり、三井グループの三井金属、石炭化学へとコンビナート化を推進する。そして日本工業倶楽部を創立して会長となり、日本の産業近代化のトップリーダーとなって活躍するのである。しかし、1932(昭和7)年3月5日、財閥の横行が民を苦しめる元凶だとする青年に暗殺されてしまう。まことに惜しんでも余りあることだが、この種の事件は歴史の上ままあることであって人間の業の深さを感じざるを得ない。



三池炭鉱の主力坑として稼働した宮原坑 写真提供/大牟田市

泉 三郎 いずみ さぶろう

「米欧回覧の会」理事長。1976年から岩倉使節団の足跡をフォローし、約8年で主なルートを通り終える。主な著書に、『岩倉使節団の群像 日本近代化のバイオニア』(ミネルヴァ書房、共著・編)、『岩倉使節団という冒険』(文春新書)、『岩倉使節団—誇り高き男たちの物語』(祥伝社)、『米欧回覧百二十年の旅』上下二巻(図書出版社)ほか。